



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

アグアスカリエンテス日本人学校における国語科教育の
実践：現地素材を用いた授業（アグアスモデル）
の開発と国語科指導を通して

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-04-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 濱野, 貴之 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00173846

アグアスカリエンテス日本人学校における国語科教育の実践

—— 現地素材を用いた授業（アグアスモデル）の開発と国語科指導を通して ——

前アグアスカリエンテス日本人学校 教諭

茨城県筑西市立関城東小学校 教諭 濱野 貴之

キーワード：現地素材、アグアスモデル、単元組込型、単元を貫く言語活動、国語塾

1. はじめに

アグアスカリエンテス市は、メキシコの中央部に位置し、およそ90万人の人々が住む治安もよい穏やかな街である。日産を中心とした自動車関係企業が多数進出しており、約900人を超える日本人が生活している。アグアスカリエンテス日本人学校は、2017年に35周年を迎え、児童生徒数は、小中併せて約110名と、中南米で3番目に大きい規模の日本人学校である。私が赴任した平成27年度には、児童生徒数が前年度の50名から2倍に増えるなど、大きな変化が見られた。教職員数は16名で、小学部低学年は主に学級担任制、小学部中・高学年および中学部は主に教科担任制をとっており、教師の専門性を生かした授業を行っている。授業については、全学年で現地理解の手立てとしてスペイン語と英語を学習している。また、隣接する現地校（私立・フランス校）との交流も積極的に行い、国際理解教育に力を注ぐとともに、市内のプール施設を借用して全校で水泳学習を行うなど、充実した環境とプログラムで教育活動にあたっている。

2. 実践内容

(1) 現地素材を用いた授業（アグアスモデル）の開発について

赴任3年目となる29年度には、「国際性豊かで、『自主性』、『発信する力』（表現力・活用力）をもった子どもの育成（第2年次）～現地素材を用いた授業モデル（アグアスモデル）の開発を通して～」を研究主題とし、全校を挙げて授業研究に取り組んだ。①交流、②特別活動、③アグアスタイム（総合学習）、④外国語、⑤教科を「五つの柱」として掲げ、教育活動全体を通して国際理解教育を推進することで、その具現化を図ってきた。ここでは、その中の⑤教科の実践について紹介したい。そして、年度末にはすべての実践を今後の学習指導に生かすために冊子にまとめた。この冊子を全職員で共有するとともに、次年度以降へ引き継ぎ、毎年更新することで末永く現地素材を用いた授業実践に活用できるものとした。



アグアスモデルの冊子

(2) 現地素材を用いた国語科学習指導（国語科アグアスモデル）

3年間、国語科主任として小学部6年生から中学部3年生の国語科指導にあたってきた。その中で意識してきたことは、現地の「人・もの・こと」を教材化し、授業での効果的な活用を通して、子どもたちの現地理解に努めることである。赴任当初は、メキシコの伝記や物語等を教材化しようと試みたが、内容が抽象的なため国語科のねらいに即するものを発掘することが難しかった。そこで、国語科では教科書に準じ、単元の学習に現地素材を取り入れる、「単元組込型」の授業を展開した。以下は、3年間の国語科実践内容の一部抜粋である。

①【単元名】「パネルディスカッションを通して、メキシコの魅力を再確認しよう」（平成29年8月）

中学2年（話すこと・聞くこと）「話し合って考えを広げよう（光村図書）」の単元組込型

パネルディスカッションを通して、話し合いの技術を身に付けるとともに、メキシコの魅力について考えを広

げられるようにすることを目標とした。そこで、「パネルディスカッションを通して、メキシコの魅力を再確認しよう」という単元を貫く言語活動を設定した。平成29年度は、より現地素材を取り入れることをねらいとして、パネルディスカッションでは、「日本の友達に、メキシコのどんな魅力を伝えたいか」というテーマで実践した。学習の流れと工夫した手立ては下記の通りである。

【学習の流れ】

- ①パネルディスカッションの目的と方法を理解し、討論のテーマを決める。
- ②テーマに対する同じ立場でグループを作り、意見を考える。
- ③それぞれの根拠を比較し、より説得力のあるものを選ぶ。
- ④役割を確認し、進行計画を立てる。
- ⑤パネルディスカッションを行い、自分の考えを広げる。
- ⑥討論を振り返り、学習のまとめをする。



パネルディスカッションの様子

【工夫した手立て】

導入では、パネルディスカッションの特性を伝え、相手意識や目的意識を明確にすることで生徒が主体的に取り組めるようにした。ディベートのように勝敗を決することが目的にならないように留意し、あくまでお互いの考えを広げ、表現力を高めることが目的であることをしっかりと理解させた。

「魅力」というと幅広くとらえられるため、「特にどんな魅力を伝えるか」と投げかけ、できるかぎり絞れるように工夫した。具体的には、「海外子女文芸作品コンクール」における創作活動の際のマッピングの内容や自身の詩や俳句、短歌などの作品を活用し、幅広くキーワードを出させた。その後、学級で話し合い、最も根拠を出しやすく第三者として知りたい部分は何なのかを考えさせた。その結果、「伝統文化」、「暮らし」、「風景や自然」の3つのテーマに絞ることができた。

まずは個人で、その後はグループで、テーマについての根拠となる資料や情報を集め、自分の考えをまとめさせた。次に、役割を分担し、パネルディスカッションの流れを理解させた。当日は、司会者の進行に準じてパネリスト同士の意見交換、フロアを交えての意見交換をすることでお互いの考えを広げ、メキシコの魅力を再確認することができた。次時に単元の振り返りを丁寧に行うことで、話し合いのねらいや技術、現地素材の生かし方を理解することにもつながった。パネルディスカッションをする際は、司会者の力が大きく影響するので、事前指導の徹底を図る必要があることや、メモを上手に取ることの大切さ、時間が許せば第2回を設定し、役割を変えて実践すると大きな効果を得られることなどが分かった。

②【単元名】「魅力的な紙面を作ろう～宿泊学習旅行記を編集する～」(平成28年6月)

中学3年(書くこと)「魅力的な紙面を作ろう(光村図書)」の単元組込型

5月末に実施した中学部宿泊学習の事後学習として、「体験から学んだことや考えたことを紙面にまとめる活動」と「国語科の『書くこと』の学習」を組み合わせた。この学習でも、単に「新聞にまとめる」という活動を行うのではなく、「地域の方に、グアダハラハラの魅力を伝える『宿泊学習旅行記』を作ろう」という単元を貫く言語活動を設定することで、相手意識と目的意識を明確にして、生徒が主体的に取り組めるようにした。さらに、様々な文章の形態(意見文・紹介文・エッセイなど)を選択させることで、その内容や目的に応じた文章を書く力を身に付けられるようにした。

また、宿泊学習で訪れた「グアダハラ」は、メキシコ第2の都市であり、セントロの文化遺産はもちろん、世界遺産に登録されている「オスピシオ・カバーニャス」や「テキーラ村」など、見所が多い。それらの魅力を伝える内容を以下の学習の流れに従って紙面にまとめ、地域へ発信することで、より「グアダハラ」に対する理解を深めることができると考えた。学習の流れと工夫した手立ては下記の通りである。

【学習の流れ】

- ①編集会議を通して、掲載内容と文章形態の選択をする。
- ②紙面構成を考えて下書きを書く。
- ③下書きを読み合い、構成や表現について推敲する。
- ④改善点を基に清書をする。
- ⑤完成した紙面を読み合い、学習のまとめをする。(冊子にして地域へ発信する。)

【工夫した手立て】

グアダラハラについての事前学習と同じにならないように留意した。単に宿泊学習の活動内容を紹介するという学習にならないように注意し、「書かされている」という気持ちにさせないために、単元の導入の際に、単元を貫く言語活動の目的とゴールを伝え、教科書を活用して、学習の流れを確認できるようにした。

また、紙面の構成を考える段階では、文章形態の種類（意見文・説明文・紹介文・感想文・エッセイなど）をあげ、それらの例を示すことで、何がどんな文章なのか確認させた。さらに、推敲の話し合いでは、付箋を活用して、改善点を視覚的に理解できるようにし、構成についてのアドバイスなのか、表現についてのアドバイスなのかははっきりと区別することで、単元のねらいに迫ることができた。

(3) 学習指導の考察

3年間の授業実践を通して、現地素材は国語科の学習指導においては、「話すこと・聞くこと」と「書くこと」の学習に適していることが分かった。これは、メキシコの題材を基にしても、これらの領域の学習活動の場合は、指導事項と単元の目標にズレが出ないためである。そして、教科書にある単元の中に、現地素材を取り入れる単元組込型の形式が最も指導しやすく、子どもたちの意欲を高めることができることも分かった。

一方、「読むこと」の学習指導では、教科書の題材と上手に組み合わせたり、平行読書指導に活用したりすることができなかった。「読むこと」の指導に適した現地素材を見つけることが非常に困難であったからである。日本の場合、教科書には魅力的な文章が選定されている。魅力的で内容が奥深いからこそ様々な言語活動を設定し、指導要領にある指導事項を身に付けさせることができる。しかし、メキシコではそこまで質の高い題材はなかった。「メキシコのものだから」という理由で安易に使用すると単元の目標とズレてしまう。導入や終末で作品を紹介したり、発展学習の中で、参考資料として扱ったりすることが精一杯であった。だからこそ、現地素材は取り入れればそれでよいというのではなく、教科の特性にあったものかどうかを、学習指導要領に基づき教材研究を進めた上で見極める必要がある。

(4) 「国語塾」の実践

本校では、「教員相互の『学びのネットワーク』を作り、教員一人ひとりの指導力を向上させ、児童生徒の学力向上や表現力・活用力を高める」というねらいから、「教科塾」という研修を行っている。これは、放課後に教師間で、塾長（各教科の専門の教師が塾長を務める）と塾生の立場に分かれ、授業作りの研修をするというものである。内容は、「授業をどのように運営するか」、「発問をどう工夫するか」、「教科書をどのように教えるか」、「教材・教具・実験器具をどのように扱うか」など、多岐にわたる。唯一、研修に共通することは、「授業力の向上を図る」という目的である。私も塾長として、下記のように3年間で14回の「国語塾」の実践にあたった。

回	期 日	内 容 (講義の演題)
1	平成27年5月4日(月)	第36回海外子女文芸作品コンクール応募に向けて
2	平成27年8月20日(木)	国語の単元構想ってどうやって考えるの？(理論編)
3	平成27年10月13日(火)	国語の単元構想ってどうやって考えるの？(演習①「読むこと」編)
4	平成28年2月8日(月)	国語の単元構想ってどうやって考えるの？(演習②「書くこと」編)
5	平成28年5月3日(火)	国語の単元構想ってどうやって考えるの？(演習③「話すこと・聞くこと」編)
6	平成28年6月14日(火)	授業の質を向上させるには？ ～グアナファト巡回指導を通して～
7	平成28年8月22日(月)	音読指導のパターン ～続・グアナファト巡回指導を通して～
8	平成28年9月20日(火)	国語科授業にスリルとサスペンスを① ～適切な課題設定と付箋の活用を通して…「故郷」編～
9	平成28年10月18日(火)	古典に親しみながら自分の考えを深める国語科学習指導の在り方 ～中学校第3学年「古典」における「論語」の一節を引用してブックレットを作る学習活動の工夫を通して～
10	平成29年2月14日(火)	俳句を作ってみよう
11	平成29年5月9日(火)	ワークシートの活用の仕方 ～ワークシート作成のポイント～
12	平成29年6月12日(月)	国語科指導で意識すべきことは？
13	平成29年9月18日(月)	国語科授業にスリルとサスペンスを② ～適切な課題設定と付箋の活用を通して…「海の命」理論編～
14	平成29年10月24日(火)	国語科授業にスリルとサスペンスを③ ～適切な課題設定と付箋の活用を通して…「海の命」実践編～

上記の国語塾の実践では、講義型と演習型のバランスをとり、できるかぎり先生方に児童生徒と同じように言語活動に取り組み、考え、発言をしてもらえるように考慮した。また、小学部と中学部どちらの指導にも活用できるような内容になるように工夫した。毎回講義の最後には、参加された先生方に、振り返りや疑問点を書いていただいた。その中には、「非常に勉強になった」、「ぜひ、今後の自分の授業でもやってみたい」、「次は、広がってしまった考えのまとめ方について教えてほしい」といった内容のものがああり、私も多くのことを学ぶとともに、何より国語科指導に対する自信がついた。授業と同じく、国語塾の準備をする際には綿密な教材研究が必要であった。「どうせやるなら先生方に喜んでもらえるようなものにしよう」と意識し努力した結果、大きな成果を得ることができた。

3. おわりに

現地素材を用いた授業の実践後にアンケートを実施したところ、「メキシコのことについて進んで考えたり、考えてきたことを友達に伝えたりすることができていますか」という設問に対して、ほぼ90%の児童生徒が肯定的な回答をしていた。このことから、現地素材を用いた授業の実践は、国際理解教育に大きな成果があることが分かった。しかし、現地素材をどのように児童生徒に提示し、学習指導要領に沿った内容にしていくかについては課題もある。

また、小6から中3までの学習の系統を意識し、同じ子どもたちが成長する姿を目の当たりにできたことは自身の指導力を向上させる上で、大きな効果があった。日本人学校での、少人数を生かしたきめ細かい指導を通して、本校の研究主題である、表現力を高めることができたと思う。国語科担当として、非常によい経験がすることができた。だからこそ、日本でも、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」の3領域のバランスを意識した指導を続けるとともに、日本人学校で学んだことを生かして、国際的な素材や地域の素材を取り入れた国語科学習指導の工夫に努めたい。

最後に、在外派遣という機会を与えていただいた茨城県教育委員会、文部科学省、当時の在籍校の先生方、関係者の方々に最大の感謝の意を表したい。この3年間、言葉では言い尽くせないほどの貴重な経験から多くのことを学ぶことができた。厚く御礼を申し上げる。